



JAPANESE SOCIETY FOR KANSEI AND WELL-BEING
日本感性福祉学会

第17回大会プログラム

大会テーマ：美と柔らかさを介した感性福祉支援

期 日：**2017**年**10**月**28**日(土)

会 場：**東北大学** 川内北キャンパス

大会会長：**行場 次朗** (東北大学文学研究科)

共 催：**公益社団法人日本心理学会 認定心理士の会**
東北大学大学院文学研究科



大会長挨拶

行場次郎

(東北大学文学研究科)

日本感性福祉学会を東北大学文学研究科心理学研究室がお引き受けするのは、第8回大会に続いて2回目となり、今回は、公益社団法人日本心理学会認定心理士の会と東北大学文学研究科との共催で開催いたします。

私どもの東北大学文学研究科心理学講座には、感覚知覚心理、認知心理、感情心理、社会文化心理学などを専攻する教員や学生がおりますが、これらのテーマを包み込むような形で、今回の第17回大会のテーマを「美と柔らかさを介した感性福祉支援」に設定いたしました。

特別講演は、『脳は美をどう感じるか』『やわらかい「わたし」のつくりかた』などの書籍を出版され、ご活躍中の慶應義塾大学文学部の川畑秀明先生にお願いいたしました。今回の大会の基調となる美と柔らかさのテーマについて感性心理学・脳科学の観点から奥深い知見をご紹介くださる予定です。

また、花王(株)感性科学研究所の引間理恵先生や、東北福祉大学総合福祉学部の大城泰造先生、東北大学文学研究科の坂井信之先生らをお招きして、シンポジウム「美しさと柔らかさを感じる心を大切にサポート」も企画いたしました。講師の先生方から、それぞれ化粧、臨床美術、食行動などの様々な観点から、大会テーマについて深い洞察を含んだお話をさせていただく予定です。

会場は、地下鉄東西線川内駅から徒歩すぐの東北大学川内北キャンパスC講義棟にいたしました。会員の皆様に研究成果のご発表や情報交換のホットな場を提供できるよう大会運営に努めますので、どうか多数の方々のご参会をお願いいたします。

大会会場周辺地図および交通案内

大会会場：東北大学川内北キャンパス 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

大会準備委員会：東北大学大学院文学研究科心理学研究室内

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 27-1

会場付近案内図



仙台駅から会場まで

【所要時間：約7分・料金200円】

地下鉄東西線「仙台駅」乗車→「川内駅」下車 南2番出口徒歩1分

【所要時間：約10分・料金200円】

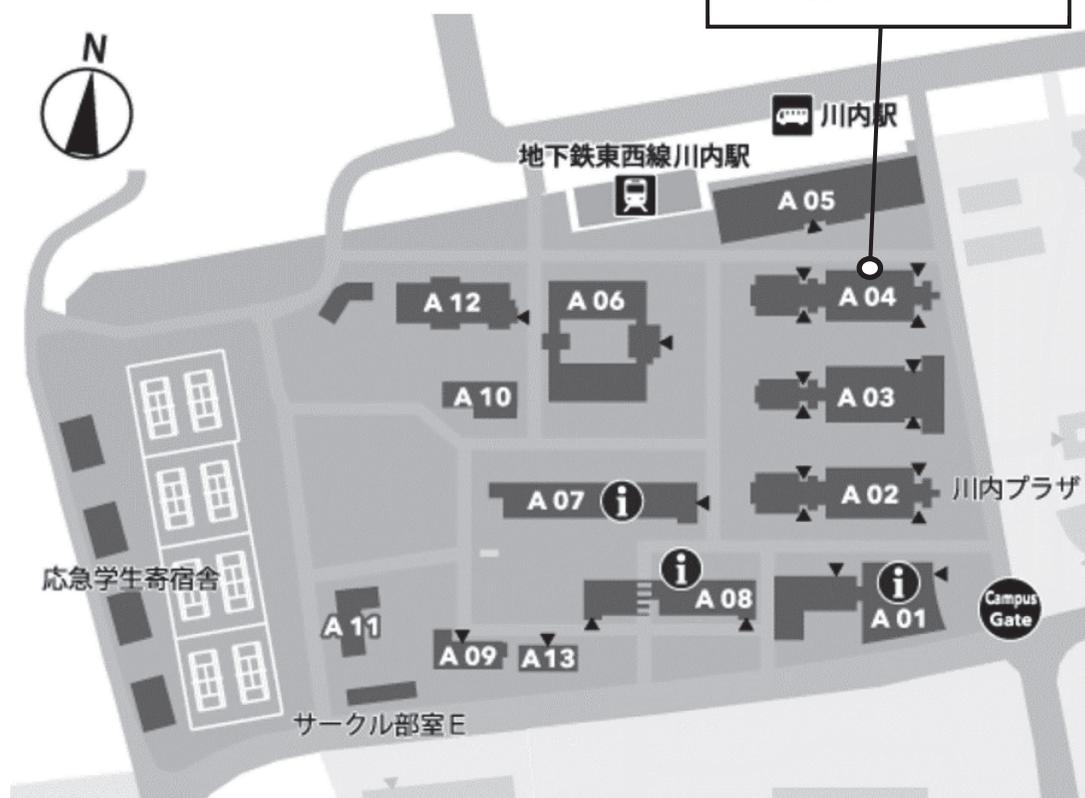
地下鉄東西線「仙台駅」乗車→「国際センター駅」下車 西1番出口徒歩5分

※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。

東北大学川内北キャンパス学舎案内

講義棟 C 棟 (A04)

- ・ 受付
- ・ 一般研究発表
- ・ 基調講演
- ・ シンポジウム
- ・ 総会



大会参加者へのご案内

- (1) 受付は、東北大学川内北キャンパス講義棟 C 棟 2F C200 教室前にて、9時から行います。
- (2) 受付にて参加費を納入した後、名札に必要事項をご記入ください。領収書、プログラム等をお渡しします。なお、大会中は名札を着用されるようお願いいたします。

参加費は以下のとおりです。

会員・非会員 5,000 円 (学会報告・プログラム・抄録集代込)

学生・大学院生 2,500 円 (プログラム・抄録集代込)

情報交換会参加費 (会員種別問わず) 5,000 円

* なお、過去の大会発表抄録集・学会報告の販売も日本感性福祉学会事務局の受付にて行っております。抄録集は各 500 円、学会報告は各 1,000 円となっております。

- (3) 学会に未入会の方は当日でも入会可能です。日本感性福祉学会事務局受付で所定の手続きをお願いいたします。

入会費：1,000 円

年会費：正会員 6,000 円 準会員 3,000 円 臨時会員 3,000 円

大会発表者へのご案内

- (1) シンポジウム・一般研究発表にてご発表の方は、その旨を必ず受付にお申し出ください。
- (2) 一般研究発表の発表時間は、発表 12 分・質疑 3 分 (計 15 分間)です。時間厳守でお願いいたします。時間はベルにてお知らせします。10 分で 1 鈴、12 分で 2 鈴、15 分で 3 鈴とします。
- (3) 当日資料を配布される方は、発表者自身で 50 部程ご用意ください。発表当日にご持参の上、あらかじめ発表会場内におりますスタッフにお渡しください。
- (4) ノートパソコン (パワーポイント) ご利用の方には、準備委員会で用意する下記仕様のパソコンをお使いいただくことができます。

OS	Windows
Office	Microsoft Office
外部ディスプレイ出力	1024×768 ピクセル程度の解像度で外部出力可能なもの
対応メディア	USB フラッシュメモリ
その他	① 発表当日は発表会場へ開始前にお越しいただき、あらかじめパソコンのハードディスクにファイルをコピーしてください。 ② パソコンの不具合の場合に備え、発表資料を印刷したもの 50 部をご用意ください。 ③ パソコンの操作は発表者にお任せします。 ④ 発表時のインターネットは eduroam 以外の使用はできません。

上記以外の規格のものをお使いの場合は、パソコンやソフトウェア等をご持参ください。ノートパソコン以外の機器 (OHP・スピーカー等) のご使用をご希望される場合は、準備可能であるかを大会準備委員会まで事前にご確認ください。

◇ご連絡・ご不明の点などございましたら、以下までお問い合わせ下さい。

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 27-1 東北大学大学院文学研究科心理学研究室
日本感性福祉学会第 17 回大会準備委員会
Tel: 022-795-6048 Fax: 022-795-3703 E-mail: jskw2017@ml.tohoku.ac.jp

大会スケジュール

- 9:00～ 大会受付 (C200 教室前)
- 9:30～12:00 一般研究発表 (C201 教室)
- 12:10～13:15 理事会・評議員会 (C201 教室)
- 13:30～13:40 日本感性福祉学会理事長のご挨拶 (C200 教室)
学会理事長：大谷 哲夫 (東北福祉大学学長)
- 13:40～13:45 日本感性福祉学会第17回大会大会長のご挨拶 (C200 教室)
大会長：行場 次郎 (東北大学文学研究科)
- 13:45～15:00 基調講演 (C200 教室)
「美と柔らかさの感性心理学と感性脳科学の展開と応用」
演者：川畑 秀明 (慶應義塾大学文学部)
- 15:15～17:20 大会シンポジウム (C200 教室)
「美しさと柔らかさを感じる心を大切にしたいサポート」
シンポジスト：引間 理恵 (花王(株) 感性科学研究所)
大城 泰造 (東北福祉大学総合福祉学部)
坂井 信之 (東北大学文学研究科)
指定討論者：川畑 秀明 (慶應義塾大学文学部)
阿部 恒之 (東北大学文学研究科)
司会：行場 次郎 (東北大学文学研究科)
- 17:30～18:00 総会 (C200 教室)
- 18:45～20:30 情報交換会(懇親会)
〒980-0021 宮城県仙台市青葉区中央 3-6-10 マックスマクタビル 3F
「DUCCA」

一般研究発表プログラム

座長：河地 庸介（東北福祉大学）

1. 9:30～9:45 『東日本大震災後における児童期・青年期の心身状態に関する分析』
○柴田 理瑛¹、平川 昌宏¹、西野 美佐子¹
¹東北福祉大学
2. 9:45～10:00 『感情の感覚・身体イメージ関連性とアレキシサイミア特性
-TAS-20 下位因子からの分析-』
○岡田 敦史¹、行場 次朗²
¹青森県立保健大学 ²東北大学
3. 10:00～10:15 『定型発達者を対象とした自閉症スペクトラム指数と視覚的短期記憶
との関連：パターンの比較段階における事象関連電位の個人差』
○高橋 純一¹、安永 大地²、行場 次朗³
¹福島大学 ²金沢大学 ³東北大学
4. 10:15～10:30 『短期的訓練が実行機能に及ぼす影響』
○阿部 千裕¹、河地 庸介¹
¹東北福祉大学
5. 10:30～10:45 『メタ認知と自己成長主導性の関連性』
○大友 ゆき¹、阿部 千裕¹、河地 庸介¹
¹東北福祉大学
6. 10:45～11:00 『香りのリラクゼーション効果：心拍変動解析による検討』
○山道 海路¹、坂井 信之¹
¹東北大学
7. 11:00～11:15 『香りの感性における国籍と性別の効果』
○姜 毅男¹、山道 海路¹、坂井 信之¹
¹東北大学
8. 11:15～11:30 『言語刺激の感性的特性は時間評価に影響するのか
- SD 法の 3 因子に着目した検討』
○朝岡 陸^{1,2}、山道 海路¹、行場 次朗¹
¹東北大学 ²日本学術振興会

基調講演

演題

「美と柔らかさの感性心理学と感性脳科学の展開と応用」

演者：川畑 秀明

(慶應義塾大学文学部)

会場：C200 教室

時間： 13 : 45 ~ 15 : 00

基調講演者 紹介



基調講演者

川畑 秀明
(慶應義塾大学文学部)

略 歴

1974 年生まれ。1997 年に鹿児島大学教育学部卒業。1999 年に九州大学大学院文学研究科修士課程、2001 年に九州大学大学院人間環境学研究科を修了。博士（人間環境学）。鹿児島大学では大坪治彦先生、九州大学では行場次朗先生、中溝幸夫先生の指導のもと、学生時代は一貫して、赤ちゃんの視覚情報処理過程を研究。

1999 年～2002 年、日本学術振興会特別研究員（DC1, PD）に従事し、2001 年～2002 年、ロンドン大学ユニバーシティカレッジ（UCL）神経学研究所神経生物学教授であるセミール・ゼキ先生の研究室の研究員となる。その頃、「美の脳内中枢」である神経機構について、機能的磁気共鳴画像法（fMRI）を用いた研究を行い、神経美学の立ち上げに従事。

2002 年 4 月より、鹿児島大学教育学部専任講師、2004 年 4 月に同・助教授（2006 年 4 月より准教授）として、教員養成における教育心理学を担当。

2009 年 4 月より、慶應義塾大学文学部准教授。現在に至る。

専門は、心理学・神経科学・芸術科学を融合した感性科学。

主な関心は、感性としての美や魅力、価値の認知過程とその脳内表現についてであるが、その根底には、「見えないもの」や「あいまいなもの」を認知したり感じ取ったり表現したりする、心の働き（心的解決過程や調整過程）に対する関心がある。

美と柔らかさの感性心理学と感性脳科学の展開と応用

川畑 秀明

(慶應義塾大学文学部)

「感性」という言葉を人文社会科学や工学などではごく普通に使うようになってきました。もともとは、美学 = “aesthetics” = 感性学であり、かつての心理学では実験美学のように極めてニッチな研究分野でしか「感性」を扱ってきませんでした。認知心理学や社会心理学、さらには脳神経科学や工学との融合により多様な領域にまたがる研究分野として、感性心理学や感性脳科学に期待が寄せられつつあります。例えば、2014年には“The Cambridge Handbook of the Psychology of Aesthetics and the Arts”と題するハンドブックまで出版され、学問としての体系的性について確立されつつあるほどです。

感性心理学や感性脳科学の中心問題は「美」や「主観性」「評価」に関するものですが、その対象は様々です。知覚心理学が従来扱ってきた画像や音、手触りなど、様々な感覚刺激の情報処理に関するものから、美術鑑賞行動や創造性といった問題、さらには認知症や諸神経疾患の予防や改善など、多岐にわたります。「美」の問題についても、芸術やデザインなどの造形的美 (artificial beauty)、自然やヒトの顔などの生物的美 (biological beauty)、さらにはコミュニケーションや道徳など社会的美 (social beauty) などが重要な対象として挙げられます。

また、人がどのように、何のために美を追究するのかという美意識の問題も感性心理学の射程に含まれると考えられます。「美は幸福を約束するに他ならない」とフランスの小説家スタンダールは述べていますが、「約束するに他ならない」という意味は「保証するわけではない」ということであり、幸福を得るためには美を追究し続けなければならないという解釈も可能でしょう。実際、幸福を感じる脳の仕組みは、美を感じる脳の仕組みと共通しています。欲求や好みを司る脳の働きを基礎として、美や幸福は感じられているのです。

現代が超高齢化社会に突入したと言われるようになって久しくなりました。人生100年の時代とも言われています。かつては(現代でもなお)老いに抗うこと(=アンチ・エイジング)が世間の関心事でしたが、今や、どのように幸せに老いを成就するか(=サクセスフル・エイジング)の時代とも言われるようになってきました。美の有り様も様々です。多様性を認め合いながら、柔軟かつ調和的に、個々人が自らの幸福を追求できる社会こそが、文化的に成熟した社会であると考えられます。まさに、感性福祉の本質であると言えるでしょう。ただその実現のためには、より深くヒト／人を科学的に理解する必要があります。

繰り返しになりますが、感性心理学の問題は様々です。美しさの感じ方は脳のどのような働きに従っているのか、美しさの感じ方を変えることは可能なのか、感性や認知の多様性や柔軟性はどのような心の働きによるのか、心の柔らかさを目指した美術鑑賞は可能なのか。本講演では、これらの問題について「美と柔らかさ」をキーワードに、感性心理学や感性脳科学が展開している具体的な研究や取り組みについて紹介しながら、これからの研究の展望や応用可能性、そして感性福祉が目指すべき姿について、皆さんと考えていきたいと思えます。

大会シンポジウム

演題

「美しさと柔らかさを感じる心を大切にしたサポート」

シンポジスト：引間 理恵（花王（株）感性科学研究所）

大城 泰造（東北福祉大学総合福祉学部）

坂井 信之（東北大学文学研究科）

指定討論者：川畑 秀明（慶應義塾大学文学部）

阿部 恒之（東北大学文学研究科）

企画司会：行場 次朗（東北大学文学研究科）

趣 旨

感性評価ではよく形容詞対が使われますが、もし「美しいー醜い」「柔らかいー硬い」で、現代の国内外の社会や政治、生活環境や人間関係などを評定してもらったら、かなりネガティブなほうに判断されるのではないのでしょうか。それゆえ、「美しさ」と「柔らかさ」は今日の様々な問題を緩和方向に導く重要なキーワードになると思います。「美しさ」には個々人の生き方を方向づける力がありますし、「柔らかさ」は可塑性や適応性に深く関係すると思います。このシンポジウムでは、花王（株）感性科学研究所の引間理恵先生、東北福祉大学総合福祉学部の大城泰造先生、東北大学文学研究科の坂井信之先生をお招きして、それぞれ、化粧行為が拓く心、臨床美術による自己との出会い、おいしさが育む豊かな感性などについてお話ししていただき、議論を深めたいと思います。今回のシンポジウムが「美しさと柔らかさを感じる心を大切にしたサポート」をより拡充する契機になることを願っています。

会場：C200 教室

時間： 15：15 ～ 17：20



美しさと柔らかさを感じる心を大切にしたいサポート —化粧でこころをやわらかに—

引間 理恵

(花王(株)感性科学研究所)

化粧で美しさとこころを柔らかにすることは可能なのでしょうか？

スキンケア化粧品は美しく健康で健やかな皮膚に導くことを目的として使用される化粧品です。またメイクアップ化粧品は、容貌を変える効果を主目的として使用される化粧品です。これらの化粧品を使うことで自身が望む美しさを実現できているのでしょうか。

「いきいきと美しく生きる」ことの経験・体験知を言語化体系化した「Generative Beauty Patterns」(Arao et al., 2012)では、「いきいきと美しく生きる」ことには「メイクによる魔法」という「外面」だけではなく、生き方、また他人との関わり方に関する「内面」があり、外面、内面はつながり、相互の影響を引き出すことを示しました。つまり「外面」だけを整えたという結果だけでは「いきいきと美しく生きる」ことを実現できないのです。

一方、化粧に関する心理学分野の研究において、化粧は感情調節としての役割があることが明らかになってまいりました。またfMRIを用いた脳科学研究においては、自分の化粧顔が素顔よりも他人の顔として認識されており、化粧によって社会的アイデンティティを創っていることが示唆された研究成果が報告されています(Onzo et al., 2008)。このことから、化粧は皮膚を整える、容姿を変えるという「外面」への効果だけではなく、人が社会で生きていくために感情調節し、社会行動へ向かう心の準備ができ、「内面」の美しさを実現することに一役かっているのかもしれません。

近年では高齢者の生活の質を高めることを目的に医療・福祉現場で化粧療法が取り入れられています。そして、その心理的効果が報告されています。その効果は一時的であり持続するのかはまだ不明ではありますが、その化粧行為が特別なことではなく、主体的に日常生活と上手く結びつけられることでその効果がうまく発揮されるののかもしれません。つまり、化粧するというプロセスが人を美しくやわらかくすることに導くのだと思います。

今回は「化粧」という行為による「外面」「内面」への作用を読み解きながら、「いきいきと美しく生きること」をどう実現、支援できるかについて考えてみたいと思います。

Arao R, et al. , “Generative Beauty Patterns: A Pattern Language for Living Lively and Beautiful,” the 19th Conference on Pattern Languages of Programs, Arizona, USA, Oct., 2012

Onzo A. et al. , “Facial perception of self and others with or without makeup,” Neuroscience 2008, Washington D.C., USA, 2008



美しさと柔らかさを感じる心を大切にしたサポート

大城 泰造

(東北福祉大学総合福祉学部)

臨床美術 (Clinical Art) とは、独自のアートプログラムに沿って創作活動を行うことにより脳が活性化し、認知症の症状が改善されることを目的として開発されました。臨床美術士が一人ひとりの参加者に沿った働きかけをすることで、その人の意欲と潜在能力を引き出していきます。1996年に医師・美術家・ファミリーケアアドバイザーがチームとなって実践研究をスタートさせました。医療・美術・福祉の壁を越えたアプローチが特徴で、アートセラピーの先進国にも例をみない先駆的な取り組みといえます。認知症の症状改善を目標として始まりましたが、現在では介護予防事業など認知症の予防、発達が気になる子どもへのケア、小学校の総合的な学習の時間、芸術保育、社会人向けのメンタルヘルスケアなど多方面で取り入れられ、いきいきと人生を送りたいと願うすべての人への希望をもたらしています。

まさしく美と柔らかさを感じる心を大切にしたサポートを目指しているわけですが、同時に最も難しい課題であるとも気づかされます。臨床美術のキーワードは「再帰性」「間主観性」「自己生成」「構成的理解」であると考えているからです。例えば何を美しいと捉えるかは主観です。同時にそれはいろいろなことを自身に問いかけてきます。例えば柔らかさというものを感じるとき、そこではコンテキストと解釈が、偶有性と一回性などが自身に問われていることに気づくでしょう。そして常に自身の感性が問われていることを意識したとき、軽々に美と柔らかさを大切にした支援をおこなっているとは言えない己を発見するのです。とはいえ、だからこそ、方向性は間違っていないと思います。物質的豊かさと科学技術至上主義が人の心のあり方や豊かさを深く洞察することに機軸を置いたものではなかったという気づきが感性福祉の基盤となっているからです。

美しさと柔らかさは美術作品だけに表れるのではなく、人と人とのつながりにおいても現れます。むしろ臨床美術で重要なことはこちらの方です。アート作品は自己との対話、他者とのつながりから生まれてきます。臨床美術士や参加者同士とつながりつつ「作品を創りながら、昨日と今日の自己の差異を感じる。差異の連続によって自己は更新され、生成され、自己の中に成長が限りなく埋め込まれ、新しい自己と再帰的に出会う (渡辺、2014)」のです。このことを可能にするためには、どのような環境が設定されるのでしょうか？このことを可能にするためには臨床美術士はどのような視座で参加者を見つめ、どのようなまなざしを向けるのでしょうか？どのような声のトーンで、大きさで、どのような表情を伴って…。なぜ臨床美術と命名したのか、なぜ関係性の学問と呼ばれるのかの理由がここにあります。

近年、EBM/NBM からオープンダイアログへと進む学問的潮流の中で、ナラティブなセオリーを確立していく重要性が指摘されています (野口、2016)。脳科学的なアプローチによる実証と並行し、当事者のナラティブの変容を捉えナラティブでもエビデンスを出す努力をする。美と柔らかさを感じる心を大切にしたサポートの効果の可視化と再現性において、このような努力が必要になると考えています。



美しさと柔らかさを感じる心を大切にしたいサポート

坂井 信之

(東北大学文学研究科)

私たちはつい、美しさは目で、柔らかさは肌で、感じるものだと思ってしまいます。生理学的には、もちろん、美しさの主体は視覚、柔らかさの主体は触覚であることは間違いありません。しかしながら、感性科学的には本当にそうなのでしょうか？

この問題へのアプローチとして、お話の最初に「味覚」を取り上げて説明をします。私たちは「味覚」は口で感じるものだと信じ込んでいますが、多くの研究から、それは幻覚で、実際は、私たちが食物を味わっているときに感じられる感覚は、ほとんど嗅覚と触覚によって構成されていること、嗅覚と触覚は実際に存在しない「味覚」を生じさせていること、嗅覚と触覚は相互作用をしながら、それらの感覚が生じている場所を口腔内に導くことなどが明らかになってきました。つまり、私たちが食物を味わっている場所は、食物の存在する口腔ではなく、脳であることがはっきりと説明されているわけです。

次に、この考えかたを美しさや柔らかさに適用した研究を紹介します。同じ人物でも香りによって顔の印象が異なること、物性が同じタオルの触り心地が香りによって変わること、香りの存在によって部屋の印象が異なることなどの現象論的研究を通じて、美しさや柔らかさも、脳が主体的に感じているものであると考察していきます。

最後に、このような感性の捉え方を福祉にどのように展開していくかというアイデアについて紹介したいと思います。モノ主体のアプローチからヒト主体のアプローチへの変換で、上手くいくようになることもあれば、上手くいかないこともあるはずですが、このような議論をフロアの方々とできることになればたいへん嬉しく思います。

一般研究発表

会場：C201 教室

時間：9：30 ～ 12：00

東日本大震災後における児童期・青年期の心身状態に関する分析

○柴田 理瑛・平川 昌宏・西野 美佐子

東北福祉大学

大規模な災害の被災者には、様々な心身反応が観察される。しかし、多くの調査は青年期以上を対象とした質問紙調査であり、質問内容の理解が難しい児童を対象とした研究は少ない。災害後の児童期を含めた子どもにおける心身状態の変化を明らかにし、変化に応じた支援を提供する必要がある。本研究では、子どもの心身状態を把握する役割を担う養護教諭を対象とし、震災後の子どもの心身状態について質問紙調査を行った。

岩手・宮城・福島県内の小中高等学 2,169 校宛てに郵送で質問紙を配布した(回収率 51.9%)。2011、2015 年度の子どもの心身状態について身体症状因子、心理的反応因子、行動変化因子の各項目についてどの程度見られたかを 4 件法で尋ねた (1:ほとんどみられない~4:大変多い)。また、質問項目以外で気になった心身反応について自由記述を求めた。

因子分析の結果、身体症状因子、心理的反応因子、行動変化因子が抽出された(最尤法、プロマックス回転)。各因子の平均得点を算出し 2 (所在地:沿岸/内陸) × 2 (年度:2011/2015) の 2 要因分散分析を行った結果、沿岸地域では内陸地域よりも心理的反応因子に関する症状が多く見られ、2015 年度では 2011 年度よりも心理的反応因子に関する症状が低減していることが示された。KHcoder ver. 2.0 (樋口, 2015) を用い、年度毎に重要単語間の共起関係を分析した結果、2011 年度に続いて 2015 年度も不安の介在した共起関係や運動不足に関連した共起関係が示された。また、2015 年度では発達障害と思われる行動の増加を示す共起関係が示された。

量的分析では沿岸部の子どもの心理的反応が 5 年間で落ち着いたように見えるものの、質的分析の結果は依然として心理的な問題を抱えた子どもが存在することを示唆している。特に発達障害と思われる行動が増加しているという養護教諭の実感は、発達障害に対する通常の支援だけではなく、震災による心への影響を考慮した支援の必要性を示唆する。

感情の感覚・身体イメージ関連性とアレキシサイミア特性 -TAS-20 下位因子からの分析-

○岡田 敦史¹・行場 次朗²

¹青森県立保健大学, ²東北大学大学院文学研究科

【目的】 岡田他 (2016) は、感情と感覚・身体イメージの関連性をモダリティ・ディファレンシャル (MD) 法 (鈴木他,2006) と新たに試作したボディイメージ・ロケーション(BIL)尺度を用いて検討し、感情ごとに結びつきやすい感覚モダリティと身体部位が存在することを示している。MD 法と BIL 尺度は、感情と感覚・身体イメージの関連性を測定することのできる心理尺度である。そこで、本研究では、個人特性 (アレキシサイミア傾向) が感情と感覚・身体イメージにどのように影響するのか、Taylor 他 (1997) が開発したトロント・アレキシサイミア尺度の日本語版 (TAS-20) を構成する下位尺度をもとに検討する。

【方法】 対象とした感情は、基本6感情 (しあわせ, 悲しい, 恐い, 怒り, 驚き, 嫌い) を使用した。MD 法では10の感覚モダリティ (温覚, 冷覚, 嗅覚, 味覚, 触覚, 痛覚, 平衡感覚, 身体運動感覚, 平衡感覚, 視覚, 聴覚) について、BIL 尺度では7の身体部位 (額, 喉, 胸, 胃, 下腹部, 体全体) について、実験参加者は関連の強さについて7段階評定した。同時に、アレキシサイミア傾向を把握するために、日本版 TAS-20(三京房, 2015)に回答を求めた。概ね10分程度で集団にて実施した。大学生153名 (男22名, 女123名, 未記入8名) (平均年齢18.8歳, SD:1.08) が実験に参加した。

【結果と考察】 TAS-20 を構成する下位尺度である感情の同定困難 (感情をラベリングすることの困難さ) (DIF)の得点を元に上位20位 (26人) を高群, 下位20位 (22人) を統制群とした。6感情ごとに、MD 法得点と BIL 尺度得点について群間の比較を行った。

BIL 尺度では、悲しいについて群間で統計的有意差があった。つまり、アレキシサイミア特性の高い者は、悲しい感情を身体部位と関連づけるとき、特有な身体イメージを形成していることがわかった。また、高群は、6感情ともに身体部位関連性を強いと評定する傾向が観察された。

MD 法では、悲しい感情と近感覚の関連性について、統制群はモダリティごとに異なった強さを示すのに比べ、高群はばらつきが少なく平坦であった。これは、アレキシサイミア特性の高い者は、感情の差異について感覚モダリティで感知することの困難性を示しているといえる。

定型発達者を対象とした自閉症スペクトラム指数と視覚的短期記憶との関連：パターンの比較段階における事象関連電位の個人差

○高橋 純一¹・安永 大地²・行場 次朗³

¹福島大学, ²金沢大学, ³東北大学大学院

自閉症スペクトラム障害 (ASD) の行動特性には、高次実行系の機能障害が影響を及ぼしている (e.g., Steele et al. 2007; Williams et al. 2005)。近年、ASD の認知・行動特性は、臨床群から定型発達群まで連続的に分布する可能性が指摘されている (Szatmari et al. 2007)。Baron-Cohen et al. (2001) は、質問紙法の観点から連続性を検討し、AQ (Autism-spectrum Quotient) を作成した。AQ は様々な認知課題との関連が示されており、定型発達者を対象とした自閉症研究で認知課題を実施できる利点がある (Grinter et al., 2009)。

Takahashi et al. (2013, 2014) は、自閉症傾向者の視覚的短期記憶 (VSTM) 特性を検討するため、AQ 指数で分けられた自閉症傾向高群 (High AQ) と低群 (Low AQ) を対象として、パターンの複雑さ (単純な/複雑なパターン) を操作した同定課題を実施した。結果から、High AQ は複雑さの影響を受けにくいことがわかり (Takahashi et al., 2013)、これは事象関連電位 (ERP) の観点からも示された (Takahashi et al., 2014)。VSTM には符号化・保持・比較の3段階があるが、Takahashi et al. (2014) は比較段階の個人差を検討していない。本研究では、比較段階における ERP の個人差を分析した。

同定課題では、目標刺激 (S1) と比較刺激 (S2) が連続して提示されるパラダイムにおいて“同じ”あるいは“異なる”の強制二肢選択法で回答を求めた。ERP の分析では、S2 の提示から 1000ms までを分析対象とした。結果から、S2 提示後 500ms 以降で後期陽性成分 (PSW) が確認された。特に、High AQ の方が Low AQ よりも PSW の振幅が大きかった。以上より、VSTM の比較段階でも High AQ と Low AQ における ERP の個人差が認められると考えられる。

短期的訓練が実行機能に及ぼす影響

○阿部 千裕¹・河地 庸介^{1, 2}

¹東北福祉大学感性福祉研究所, ²東北福祉大学総合福祉学部福祉心理学科

実行機能 (Executive Functions) とは、行動や思考が適応的な形でなされるように制御する機能とされている。短期記憶の情報を追加・削除する「更新」機能、心的構えを柔軟に他のものへと変える「切替」機能、適切ではない反応を行わないようにする「抑制」機能の3要素から構成される。先行研究では、各々を反映する課題について1か月以上の集中的訓練による課題成績の向上が報告されている。しかし、多くの認知機能において数10分単位の短期的な訓練は課題成績の向上に効果をもたらすことから、本研究では実行機能においても30分程度の訓練が課題成績の向上をもたらすかを検討した。

参加者は大学生・大学院生24名であった。実行機能の各要素を反映するとされる以下の3つの課題を実施した。更新機能を反映する keep track 課題、切替機能を反映する category switch 課題、抑制機能を反映する stop signal 課題について、各課題の試行を繰り返すことで訓練を行った。

全試行を複数のブロックに区切り、各課題成績について反復測定分散分析を行った結果、抑制機能は有意傾向ではあるものの ($F(5,100)=2.20, p=.061$)、更新機能と切替機能はそれぞれ有意に課題成績の向上が見られた ($F(3,207)=12.59, p<.001$; $F(7,161)=3.90, p<.001$)。抑制機能は約10%、更新機能は約18%、切替機能は約57%の課題成績向上率であった。

本結果は短期的訓練によっても実行機能改善が可能であることを示唆する。本効果を踏まえて、短期的訓練研究の意義や今後の展望について考察する。

メタ認知と自己成長主導性の関連性

○大友 ゆき¹・阿部 千裕³・河地 庸介^{2,3}

¹東北福祉大学大学院総合福祉学研究科福祉心理学専攻,

²東北福祉大学総合福祉学部福祉心理学科, ³東北福祉大学感性福祉研究所

メタ認知は、「認知について認知」とも言われ、自己の心的状態を理解する能力として定義される。関連して、自己成長主導性 (PGI) はメタ認知的な構成概念として注目を集めている。PGI とは、自己改善のための認知的・行動的スキルを発展させることとして定義され、認知的側面 (「計画性」と「変化への準備」と行動的側面 (「積極的な行動」と「資源の活用」) によって構成される。これらの構成概念の背後には、メタ認知の 2 つの構成要素である「メタ認知的知識」と「メタ認知的行動 (モニタリングとコントロール)」が存在している可能性が示唆されている。しかしながら、メタ認知と PGI の関連性を定量的に検討した研究はない。本研究では自己成長主導性尺度 II (PGIS-II) と成人用メタ認知尺度という 2 つの質問紙を用いて、PGI におけるメタ認知の影響を検討した。

PGIS-II における 4 つの下位因子をそれぞれ目的変数とし、成人用メタ認知尺度の 3 つの下位因子を説明変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った結果、「メタ認知的知識」は「計画性」 ($\beta=.25, p<.05$) と「積極的な行動」 ($\beta=.44, p<.001$) に、「モニタリング」は「計画性」 ($\beta=.31, p<.01$)、「変化への準備」 ($\beta=.44, p<.001$)、「資源の活用」 ($\beta=-.29, p<.05$) に、「コントロール」は「資源の活用」 ($\beta=.40, p<.01$) にそれぞれ影響しており、メタ認知の異なる側面が PGI の 4 つの下位因子に影響することが示された。

本研究から、PGI はメタ認知の 3 つの下位因子で表現できる可能性が示された。発表では、PGI とメタ認知に関する行動指標との関連性についても合わせて報告する。

香りのリラクセーション効果：心拍変動解析による検討

○山道 海路・坂井 信之

東北大学大学院文学研究科

【目的】 本研究の目的は、香りのリラクセーション効果を生理心理学的に検討することである。本研究では自律神経系の活動を心拍変動解析によって調べる。心拍変動解析では、心拍変動の高周波成分 (HF : 0.04-0.15Hz) と低周波成分 (LF : 0.15-0.40Hz) を FFT 演算により算出する。本研究ではこの対数変換値を用い、副交感神経活動の指標として LnHF を、交感神経活動の指標として LnLF/HF を使用する。

【方法】 東北大学の学生 14 名が参加した (男性 11 名, 平均年齢 22.07 歳)。香り刺激の提示にはアロマシューター (株式会社アロマジョイン) を使用した。香り刺激には同社製のバニラ, シナモン, ローズマリーを用いた。心拍の計測には加速度脈波計 TAS9VIEW (株式会社 YKC) を用いた。

計測の間, 参加者は閉眼安静の状態を着席することを求められた。計測開始から 150 秒間が経過した時点で, 香り刺激が 20 秒間提示された。その後, 300 秒間の計測が引き続き行われた。各参加者は 3 種類の香り刺激に対して 1 試行ずつ計 3 試行を行った。

【結果と考察】 心拍数, LnHF, LnLF/HF が算出された。FFT 演算の時間窓は 150 秒間に設定した。データとして香りの提示前 (Before), 香りの提示後の 150 秒間 (After1), After1 後の 150 秒間 (After2) の各時点での値が得られた。

心拍数, LnHF, LnLF/HF の各指標について参加者内 2 要因分散分析 (香り刺激×時点) を行った。その結果, LnHF における時点の主効果 ($F(1.65, 3.68) = 5.83, p < .01$) のみがみられた。多重比較の結果, After1 が Before や After2 よりも有意に小さかった ($ps < .05$)。

この結果からは、香りのリラクセーション効果が確認されたとはいえない。今後、自律神経系の微細な変化をとらえるために、精神的負荷がかかった状態をベースラインに設定した実験を行う必要がある。

本研究では香りの提示後の LnHF の低下が一様にみられた。このことから、香りが副交感神経活動を抑制したことが示唆される。一方で、実験に対する苦痛がリラクセーション効果を上回ったために、副交感神経活動が抑制された可能性がある。今回の課題はなるべく動かさずに着席するのみのものであったが、今後はより苦痛の少ない課題を設定する必要がある。

香りの感性における国籍と性別の効果

○姜 毅男・山道 海路・坂井 信之
東北大学大学院文学研究科

本研究では、視覚刺激の色彩と形態が香りの感性評価に及ぼす影響における評定者属性の効果を検討した。本研究には、正常な嗅力と視力を持つ東北大学の学生 31 人がこの実験に参加した。内訳は、男性が 15 名、女性が 16 名で、日本人が 17 名、中国人が 14 名であった。本研究では、評定者はパソコンの画面に表示された画像・図形を見ながら、提示された香りに対する印象評価を行うという実験を行った。嗅覚刺激はレモン香料とラベンダー香料の 2 種類、視覚刺激は 3 種類の色彩(黄色、紫色、白黒)と 3 種類の形態(レモンの形、ラベンダーの形、四角形)の組み合わせ(計 9 種類)であった。評定者は、提示された嗅覚刺激と視覚刺激との組み合わせに対して、香りの強度、快・不快、視覚刺激と嗅覚刺激の一致性の三項目についてカテゴリー評定法(0~10 の 11 段階)により評価した。結果では、レモンの香りの強度評価において、性別の有意な主効果、性別 x 国籍の有意な交互作用が見られた。一方で、ラベンダーの香りにおいては、強度評価で、性別の有意な主効果は見られたが、性別 x 国籍の有意な交互作用は見られなかった。つまり、香り(レモンとラベンダー)に対する女性の強度評定値が男性より高いことが分かった。また、香りの快・不快評定において、レモンの香りとラベンダーの香り両方で、性別と国籍の有意な主効果、および性別 x 国籍の有意な交互作用が見られた。具体的には、中国人と比べ、日本人は香りに対してより快と感じていることが見られた。また、中国人においては、男性より女性の方が香りを快く感じるということがわかった。一方、日本人においては、男性の方が香りに対する快・不快の評定値が高い傾向にあることが分かった。視覚刺激と嗅覚刺激の一致性評価については、2つの香りとも、性別および国籍の有意な主効果、性別 x 国籍の有意な交互作用はともに見られなかった。これらの結果から、香りの感性評価において、国籍や性別の影響が見られることがわかった。また、一般的に、香りに対しては、中国人より日本人の方が積極的な態度を持つこともわかった。さらに、中国人の場合は、性差の差異が明らかであったが、日本人の場合は、差異がほとんどなかった。今後は、香料の種類を増やして結果を検証する必要があると考えられる。

言語刺激の感性的特性は時間評価に影響するのか - SD法の3因子に着目した検討

○朝岡 陸^{1,2}・山道 海路¹・行場 次朗¹

¹東北大学大学院文学研究科, ²日本学術振興会

【目的】 時間の流れは一定である。しかし、我々の経験する時間は様々な要因によって伸縮する。これまでの研究から、視覚刺激の大きさや輝度などの物理的特徴だけでなく、絵画の印象や顔の魅力度などの感性的な要因も主観的時間を歪ませることが示されている。しかし、言語刺激がヒトの時間評価にどのような影響を及ぼすのかはあまり検討されていない。本研究では、感性に関わる形容詞に着目し、その意味内容の違いによって時間評価が変化するかどうか検討した。

【方法】 東北大学の学部生、または院生 14 名が参加した (男性 8 名, 平均年齢 20.64 歳)。刺激として、セマンティック・ディファレンシャル(SD)法で見出される評価性、力量性、活動性因子から代表的な形容詞を 3 対 (正の意味と負の意味を持つ形容詞のペア) ずつ選定した (評価性: 良い-悪い, 好きな-嫌いな, 美しい-汚い; 力量性: 重い-軽い, 暗い-明るい, 緊張した-緩んだ; 活動性: 騒がしい-静かな, 動的な-静的な, 派手な-地味な)。

時間評価の測定方法として、刺激の提示時間をキー押しで再生する、時間再生法を使用した。参加者がスペースキーを押すと、画面中央に一種類の形容詞が提示された。この提示時間は 1.0, 1.5, 2.0, 2.5, 3.0, 3.5 s のいずれかであった。その後、参加者はスペースキーを二回押すことで形容詞の提示時間を再生した。再生中、画面には何も提示されなかった。各参加者は 18 (形容詞の種類) × 6 (提示時間) の 108 試行を行った。

【結果と考察】 まず、提示時間ごとに再生時間の平均値から $\pm 3SD$ 離れたデータを外れ値として除外した。つぎに、因子条件、正負条件ごと再生時間から刺激提示時間を引いた定誤差とその平均値を求めた。定誤差について、参加者内 2 要因分散分析を行ったところ、因子条件と正負条件の主効果、交互作用は全て非有意であった (因子: $F(2,26) = 3.06, p=0.06$; 正負: $F(1,13) = 0.02, p=0.88$; 交互作用: $F(2,26) = 0.41, p=0.67$)。

この結果は、形容詞の意味内容の違いによってヒトの時間評価は変わらない可能性を示している。しかし、本研究では、形容詞選定の際、その文字数や形態的複雑さなどを統制していなかったため、今後はそれらの要因を考慮し、サンプル数を増やした追加実験を行う必要がある。

